

日本における動物園での環境教育・保全教育の可能性

——これまでの歴史と現状からの検討——

北海道大学大学院文學院 陳曦

要旨

本研究（研究論文Ⅰ）は文献調査を通じて、日本の動物園における環境教育・保全教育の歴史、現状と課題を明確し、そしてそれらの課題を解決するための新たな視点と可能性を明らかにすることを目的とした。

第1章では、まず海外と日本における環境教育と保全教育の歴史変遷を概観し、次に動物園における環境教育と保全教育の内容と特徴、そして両者の関係について考察した。環境教育が環境問題の解決を目標として設定することと比べ、保全教育は生物多様性の保全、特に野生動物の保全を目的とすることでよりメッセージ性が強く、来園者に伝えやすいため、動物園における保全教育が保全に関する意識向上と行動変容に対する効果が期待できることが明らかにした。

第2章では、環境教育と保全教育を区別せず、日本の動物園における環境教育・保全教育に関する実践について述べた。まずは団体・組織による動物園における環境教育・保全教育の実践について紹介した。次に、先行研究において紹介された動物園における環境教育・保全教育に関する実践の調査結果を述べた。最後に、考察として、日本の動物園における環境教育・保全教育に関する実践の現状と傾向について整理した。概して、動物園における環境教育・保全教育は多くの場合、学校教育の一環として、生活科などの教科の内容として利用されている。コロナ以後、オンラインによる動物園の教育活動が多く行われてきており、これまで動物園教育の空間や時間の制約のハードルを下げる利点考えると、今後も対面とオンラインを併用するハイブリッド方式で行う可能性が高いのである。

第3章では、第2章の調査結果に基づき、日本の動物園における保全教育の実践と研究の現状を踏まえて、現代日本の動物園における保全教育の課題を解決するための視点を以下のように提案した。①動物園における保全教育活動を考案と施行する際には、それぞれの動物園にある地域の住民と野生動物のかかわりの歴史と現状、すなわちその地域の動物観を明らかにする必要がある。②そのうえ、動物園における保全教育は子供たちのセンス・オブ・ワンダーを育ちつつ、人間の活動によって野生動物の生息地が破壊される現状を動物園の体験型学習を通じて教える、または体験させることが重要である。③動物園は来園者が展示動物の「可愛らしさ」にとどまらず、野生動物に対する正しい態度を養わせ、個体への愛情から生物多様性保全へ繋がるように、現在の展示方法を見直し、若い世代に多いエキゾチックペットの潜在消費者にターゲットとする保全教育プログラムを考案・実施することが重要である。④行動変化がその人の心情としてなぜどのように起こったかの「契機」と「プロセス」を研究する保全心理学、ナッジ理論などの行動経済学の分野の知見、そして特定のターゲットに働きかける社会・行動変容コミュニケーション（SBCC）などの科学的なアプローチを、動物園における保全教育に活用する必要がある。

終章では、研究論文Ⅰを通して明らかになったことを結論としてまとめ、本研究の課題と今後の研究方針について述べた。